第1回「トルコ経済史会議」報告

A Short Report on the
First Economic History Congress
(7-8 September 2007, Istanbul, TURKEY)三 沢 伸 生^{*}
MISAWA Nobuo

2007年9月7～8日の両日、トルコ経済史研究プラットフォーム Türk İktisat Tarihi Araştırmaları Platformu 略称 TİTAP (Turkish Platform for Economic History Studies)が主催する第1回トルコ経済史会議 Birinci İktisat Tarihi Kongresi (The First Economic History Congress) ⁽¹⁾ がイスタンブールのマルマラ大学において開催された。

トルコ経済史研究プラットフォームは、トルコ共和国において既存の大学・研究機関の枠を越えて、経済史研究を志向する研究者たちが経済史研究の振興と、そのための国際的な研究者の協調を目的として設立された団体である。ここで特筆されるべきはトルコ経済史の研究の振興と同時に、全世界の経済史の振興を目的としている点である。

1970年代以降、世界的な社会経済史研究の高揚と並行して、トルコにおいても社会経済史関係のセミナーや会議が組織され運営されてきた。例えば1973年にアンカラのハジェテペ大学で組織されたトルコ経済史セミナー Türkiye İktisat Tarihi Semineri や1977年にアンカラで初めて開催されたトルコ社会経済史国際会議 Uluslararası Türkiye'nin Sosyal ve Ekonomik Tarihi Kongresi (International Congress on the Social and Economic History of Turkey) ⁽²⁾ などが挙げられる。この間に世代交代が進んだとはいえ、構成員の多くは共通であり、21世紀を迎えて本大会の運営母体が社会史の枠を取りはずして経済史に特化したことも大いに興味深い。

大会は初日にトルコにおける経済史研究の貢献者として、3人の重鎮、すなわちハリル・イナルジク Halil İnalcık、ハリル・サーヒリオウル Halil Sahilioğlu、メフメト・ゲンチ Mehmet Genç の3名への特別表彰に始まった。高齢に達したオスマン朝社会経済史の3重鎮が久々揃って旧交を温める光景は第1回の経済史会議の幕開けにふさわしいイベントであった。続いてイナルジクが短い特別講演を行ってから、早速に研究部会発表に移った。部会は8会場に別れ、延べにして160以上の発表が行われた。こうした大

* 東洋大学准教授
Associate Professor, Toyo University

会の常として何名かは会場に現れなかったものの、総じてキャンセルとなった発表は少なかった。大会が終了して10ヶ月以上が経過している本稿執筆時においても、ネット上に変更以前の当初の大会プログラム (URL: <http://www.titap.org/kongre>) が残されており、その概要を知ることが可能である。報告時間は各自20分、質疑が10分間で構成されることが原則であった。報告言語は原則としてトルコ語と英語であったものの、ほとんどがトルコ語で行われ、英語などトルコ語以外の発表は稀であった。そもそも国際会議を目指したものの、発表者・参加者の多くはトルコ人研究者であり、トルコ国外からは欧米諸国から数名、日本からは筆者のみが参画するに止まっていた。最近では前オスマン期及びオスマン朝研究国際学会 (CIEPO) をはじめとしてこの種の国際会議の開催が多くなったこと、初回の会議ということで広報の周知徹底が不十分であったことが原因として想定される。実際、大会実施本部の説明では断食月の関係で開催日が当初の告知よりも早めたそうであるが、報告者たちにすら開催直前になってようやくその告知がなされるなど混乱ぶりが認められたことも事実である。

ほとんどの発表は、時代的にはオスマン朝期・トルコ共和国期の経済史研究に集中し地理的には旧オスマン領から中央アジアまで及んでいた。こうしたなかで本大会の運営に係わった2人の発表が注目を集めた。

そのうちの1人、オスマン朝末期からトルコ共和国にかけての社会経済史ザフェル・トプラク Zafer Toprak は、「トルコにおける経済史の発展諸段階」と題してトルコにおける経済史研究の学説史の整理を行った。近代における雑誌を中心としたメディア史料を渉猟・駆使して実証的な社会経済史研究を展開してきた同氏が、世界的な経済史研究の形成発展を見据えながらトルコにおける研究の位置づけを行うもので、今後の学説史の指針を示すものであった。先にあげたイナルジクの記念講演に続いて講堂で行われたこの発表は、部会司会を務めたゲンチによる自身の実体験を交えてのコメントを加わったことにより生き生きとした学説史の検討となり、筆者が聴取した限り本大会で最も注目を集めた発表であった。

もう1人、シェヴケト・パムック Şevket Pamuk は、「オスマン帝国における国民総所得の試算, 1500-1914年」は、同氏の得意とするオスマン帝国における国民総所得や国民総生産など経済の実態に示す経済指標の試算を行い、複数のグラフによって、その変動を示したもので、トプラクと同じく学界における今後の検証・議論に一石を投じる試論であり、聴衆の多くから質問が集中した。

2日目の最後に、ゲンチによる本大会の総括でもって大会が締めくくられた。初日に引き続き、過去半世紀にわたって経済史研究の第一線で活躍した証人として、逸話を盛り込みながら機智あふれる洒落たコメントは極めて意義深いものであった。その後のエ

クスカーションの宴席上、パムックによって、成功裏に終わった本大会を今回に限ることなく、できれば隔年程度のサイクルでトルコ国内で順次開催していきたい旨のアナウンスがなされた。先に述べたように今回の開催の事務は必ずしも整然としていたわけではなかったので、是非とも内外にきちんとした広報を行い、2回目の大会が開催されることを期待する。また次回開催のための告知を兼ねて、今回の大会に出席しなかった研究者への発信として今回の大会の報告集が刊行されることが望まれる。

注

- (1) プラットフォームの概要については、そのホームページ (URL: <http://www.titap.org>) を参照のこと。
- (2) その成果は、以下のような抄録によって確認することができる。Osman Okyar (ed.), *Türkiye İktisat Tarihi Semineri: metinler/tartışmalar, 8-10 Haziran 1973*, Ankara, 1975; Osman Okyar & Halil Inalcik (eds.), *Türkiye'nin Sosyal ve Ekonomik Tarihi (1071-1920): Birinci Uluslararası Türkiye'nin Sosyal ve Ekonomik Tarihi Kongresi Tebliğleri = Social and economic history of Turkey (1071-1920): papers presented to the First International Congress on the Social and Economic History of Turkey, Hacettepe University, Ankara, July 11-13, 1977*, Ankara, 1980; Heath W. Lowry & Ralph S. Hattox (eds.), *IIIrd Congress on the Social and Economic History of Turkey, Princeton University, 24-26 August 1983*, Istanbul, 1990; V. Milletlerarası Türkiye Sosyal ve İktisat Tarihi Kongresi tebliğler: *Marmara Üniversitesi, Türkiyat Araştırma ve Uygulama Merkezi, İstanbul 21-25 Ağustos 1989*, Ankara, 1990.